

【NTR支配】 夫の上司に墮とされる強制絶頂

（夫との電話中に最奥を貫かれ、共犯者にされた献身妻）

サンプル（一部抜粋）

「奈々、そろそろ仕事に行くよ！」

今日は少し特別な朝。理由は夫の昇進が決まる日だから。

私と夫の祐也は約五年前に結婚した。優しくて穏やかで誠実。そんな祐也に出会えた事が、私の幸せだった。

一度も遅刻も欠勤もせず、仕事を頑張る祐也はようやく昇進が決まりそうだと言っていて、私はそんな彼を応援していた。

「多分今日、黒崎さんから正式に話があると思う。」

「黒崎さんって…たしか上司の？」

「そうそう。あの人、ちよつと怖いからな…。緊張するけど…」

「祐也なら大丈夫！いつも頑張ってるの、知ってるよ。きっと大丈夫だよ。」

不安がる祐也に笑顔を向け、エールを送る。

「ありがとう、元気でた！」

帰り、ケーキでも買ってくるから。じゃ、行ってきます！」

ドアがガタンと閉まる。

きっと良い顔で帰ってくるんだろうな。今日は祐也の好物を沢山作ってお祝いしなきゃ。そんな未来を当たり前のように思い描いていた。

その裏で悪魔が私の日常を壊そうとしているなんて、想像する事もなく。

夫の好きなご飯を作ろうと下準備をしていた夕方、私のスマホが鳴った。

「奈々……」

祐也の声が、なぜか暗く曇っていた。

「……どうかしたの？」

「うん……実はさ……仕事で大きなミスをやらかしてしまって……」

昇進は一旦見合わせるって言われて、むしろ降格かクビになるかもしれない……」
想像もしていなかった告白に、私はどんな言葉を返せばいいか分からなかった。

「あと今日はそのミスで色々と忙しくて、帰れないかもしれない。」

「……わかった……」

「ごめん。」

ピッと切れる通話。朝、あんなにウキウキしていたのに……。あの人がミスをするなんて、今までで初めての事じゃないかな……。仕事の事を全て、私に話しているかは分からないけれど……。でも珍しい事だとは思った。

(中略)

そうして十分が過ぎた時、見知らぬ番号から着信が来た。

「……はい？」

「……もしもし。高木祐也さんの奥様ですか？」

低く重厚感のある男性の声……。

「そう……ですが……」

「祐也さんの上司の黒崎と申します。突然お電話して申し訳ございません。」

緊急でしたので、緊急連絡先として登録されていた奥様にお電話したのですが……。

黒崎さんって祐也が少し怖いって言っていた人……だよ……。

「お世話に……なっております……。あの、主人に何か……」

「……昇進の話が保留になった件は、もう聞かれました？」

「え、ええ……。主人から電話がきて……ミスをしたと……」

「……ミス、なんて軽いものではないですがね。」

「え…？」

「正直に申し上げますと、今、祐也さんの解雇の話も出ていて」

「解雇…？」

「…ええ。」

「そんな…」

「ただ僕がこうして奥様にご連絡したのは、僕ならどうにか出来るからです。」

「どうか…とは…？」

「…詳しい話は今夜、直接しましょうか。電話でするような話ではないので。」

今夜九時、会社近くのシティーホテルで待っていますよ。

もちろんご主人には何も告げずに来てくださいね。」

断る隙を与えないように次々に言葉を吐き捨てられる…。

「ちよ、ちよっと待ってください…」

「何か？」

「主人には言わずにホテルなんて…」

「…もしかしたら解雇の話がなくなるかもしれない、ってご主人に伝えるつもりですか？どう
いう風に話が転ぶかも、まだ分からないのに。」

そんな風に期待させるような事を言つて、もし解雇が決定したらどうなさるおつもりですか？」

冷静に淡々と告げられる言葉…声から感情を読み取る事ができない。

もし…私が黒崎さんと話をして、祐也を助けられるのだとしたら…行かない選択肢はなかった。幸い、今日は祐也が帰ってこないかもしれないし、バレル可能性は限りなく低いはずだし…。

「…わかりました…。今夜、お伺いします…」

覚悟を決め、承諾の返事をする、電話の向こうからくすつと笑う声が聞こえた。

「……？」

「聡明な奥様なら、そう決断するだろうと思っていましたよ。
では、また後ほど。」

(中略)

「…っ、お願いします…。どうか、あの人が解雇されずに済むように…」

お願いします…」

二人の間に置かれた丸いテーブルに頭をこすりつけるように、私はとにかく必死で頭を下げた。

「いいですよ。」

「本当…ですか？」

「ええ。ただし対価を払えば、ですが。」

「対価…？」

「まさか何の対価もなく、動いてもらえるとても？」

「……」

「タダより高いものはない……そう思いませんか？」

「さあ、奈々さんは僕にどんな対価を支払うつもりですか？」

「そう冷たい目で言われ、言葉に詰まった。」

「つまりお金を支払えという事だよね……？ 貯金はそこまで多くはないけど、それで未来の安泰が保証されるのなら、支払わない訳にはいかないよね……」

「そう思って口を開こうとした瞬間、黒崎さんが片手を私に向け、制止してきた。」

「……」

「奈々さん。」

「対価として何を支払うのか……答えるチャンスは一度だけです。」

「もし、その答えがつまらないものなら、僕はすぐこの場を去りますよ。」

「……一度……」

「……ヒントはあげましょうか。たった一回しかチャンスがないんですからね。」

「一、僕はお金に困っていません。」

「二、欲しいのはあなただ。」

「まっすぐに目を見てそう言われ……私は言葉を失った。こんなのは……ヒントでもなんでもなくて、」

何を求めているかの答えだよね…。

「私に…浮気しろとおっしゃるんですか…」

愛する夫を裏切って、夫の上司と浮気をするだなんて、ありえない。そんな事、許されるはずもない…。

「…いや、浮気しろ、だなんて言っていないですよ。

断る権利はもちろん奈々さんにもあります。

ただそうなれば、証拠を持ってしかるべき措置をとるだけです。

どちらがご主人の為になるんでしょうね？」

黒崎さんの言葉に、私は息を飲んだ。祐也を助けたい。今の生活だって守りたい…

「……」

私一人が我慢すれば…全ては今まで通りに進む。選択肢は一つしかなかった。

「私を…黒崎さんの好きに…してください…。」

屈辱的だった。普通の主婦の私が、こんな事を口にするなんて。

でも…もうこれしかなかった。

私の答えを聞いた黒崎さんは、楽しそうにフツと軽く笑った。

「…奈々さんならその決断をすると信じていましたよ。」

（中略）

「…まずは浅い所からいきましようか。」

黒崎さんの言葉が耳に届いた瞬間、浅い場所をぐちゅつと押し上げられた。

「いあああ…ああ…、や、つ、は…ああ…んぐっ」

身体がびくつと震えるような刺激…。気持ちいいんじゃない、ちがうちがうちがう…絶対に…ちがう…

「んん…んっ、そこ、やだ、指とめて…ください、ああ…っ」

黒崎さんが浅い所を抉る度に、ぐちゅぐちゅと鳴り響く音が大きくなっていく…。

強引なのに…絶対に止めない指が意地悪なのに…

「は…やだ、ああ…イっちゃう…っあああっ」

あっという間に限界まで、私は追い込まれていた。

「あれ、気持ちよくないんじゃないですか？」

「っ、あああ、は…気持ちよく、ない、祐也の方が…いい…あああ」

腰が勝手に浮いてしまう。助けてあなた…。このままだとイっちゃう……

「へえ。ご主人の方がいいって？」

黒崎さんの冷たい声…もう少しでイってしまう…

でもそのタイミングで、黒崎さんは押し上げる指を止めてしまった。

「あ…あ…っ、や…」

身体は残念がつてヒクヒクと小さな痙攣を繰り返す。まるで彼の指の動きを求めるように。
「…残念だなあ。素直になれば、そのままイかせてあげたのに。」

イかせてと懇願するまで、追い込んでみましょうか。」

「っ、私が…そんな事…懇願するわけ…」

「そうですね。」

自分の意思で夫を裏切つて、他の男の愛撫に悶えて、イかせてと願うなんて純愛を貫く奈々さんなら、『無い』ですよね。」

(中略)

「もうやめて…ください…そこ、ぐちゅぐちゅしちやだめ…ん…あ…」

私の力の無い言葉に黒崎さんは鼻で笑った。

「……うーん。そこまでお願いするなら、やめましょうか。」

「本当に…？やめて…くれるんですか…？」

「ええ。さつきから、涙がこぼれていますよ。」

綺麗な女性を泣かせるのは趣味ではありませんので。」

涙が流れている事にすら気付けないほど、自分が限界だったのかと思いつながら、案外優しい黒崎さんに感謝した。

「ありがとうございます…」

だけどホッとした瞬間、今までで一番強くぐちゅぐちゅと気持ち良い所を刺激するように黒崎さんの指が激しく動いた。

「ばああああ…ああ…うそ、つき、いっ…やめる…って…えああっ」

「…やめるわけないでしょう？」

冷たい言葉、余裕そうな表情、強引なのに抗えない愛撫…一度安心してから落とされ…もう限界だった。

「イぐ、イ…っ、…あああ…」

「イきたいんですか？」

「イ…きたい…イかせて、おねがい…い…あああ…イか…せて…っああ…」

もう早く、楽になりたかった。身体がヒクヒクと絶頂を求めて小さな痙攣を繰り返す。私の弱点を抉るその指を、もう止めないで…欲しかった。

「…やっと僕の望む言葉が聞けた。」

（支配の全容は製品版にて）